

台湾布袋戲の現状（三）

渡 邊 幸 彦

はじめに

筆者は、前稿『台湾布袋戲の現状（一）』（『同朋文化』第二号、2007.3 発行）で、戦前より現在に至るまでの台湾における布袋戲劇団の変遷について概観し、さらに『台湾布袋戲の現状（二）』（『同朋文化』第四号、2009.3 発行）では、2007年と08年の近二年を中心とした台湾布袋戲劇団の活動傾向を検証し、将来の方向性についての分析を行うことでいったんまとめとした。ところが、その後一年間の布袋戲界の動きを観察してみると、特に海外交流の面で近い将来台湾布袋戲に大きな影響を与えかねない新たな動きがおこってきていると感じられる。そこで、今回は年次報告として2009年の主たる活動を取り上げて分析し、前稿の補いとしたいと思う。

1 台湾での活動

1-1 地域主導の取り組み

1-1-1 台北

2009年度は「文建會」（行政院文化建設委員會）主催の「外台匯演」が無い中間年であり、2007年に倣って台北市主催の「臺北市98年掌中戲觀摩匯演」が再び開催された。前年は台北市主催で歌仔戲の同様の行事が催されており、ちょうど「文建會」の「外台匯演」と対をなす形で交互開

渡 邊 幸 彦

催を定着させつつある。

今回の「掌中戲觀摩匯演」は、保安宮から萬華艋舺公園に場所を移し、前回大会よりほぼ二ヶ月前倒しの日程で、参加団体も二団体増で行われた。以下日程と演目を示す。

団体名	演目	日程
小西園掌中劇團	『孫贖鬥海潮』	7/3 (金)
新興閣掌中劇團	『武童劍俠』	7/4 (土)
陳錫煌傳統掌中劇團	『鮑自安打播』	7/5 (日)
亦宛然掌中劇團	『水滸傳系列之盧俊義』	7/6 (月)
五洲桃興閣掌中劇團	『白馬風雲傳破一谷三宮五大堡傳』	7/7 (火)
新西園掌中劇團	『精忠岳傳－決戰牛頭山』	7/8 (水)
新快樂掌中劇團	『秦王與孟姜女』	7/9 (木)
新洲園掌中劇團	『三國演義之取長沙』	7/10 (金)
日月興掌中劇團	『勝者為王－太子傳奇』	7/11 (土)
台北興洲園掌中劇團	『隋唐演義：十八路反王』	7/12 (日)
全西園掌中劇團	『馬鞍山』	7/13 (月)
響洲園掌中劇團	『大明奇俠傳之濟南認親』	7/14 (火)

今回もコンテストの形を取っており、審査結果は台北市から公告されている。優良団体獎として「亦宛然」「新西園」「全西園」の三団体が選ばれ、個別獎は、最佳武場獎が「亦宛然」、最佳幕後主唱獎と最佳創意製作獎が「新快樂」、最佳文場獎が「台北興洲園」、最佳主演獎が「全西園」と、五部門を四団体が分け合うこととなった。老舗の団体である「小西園」や「新興閣」、また李天祿氏の長子である名人陳錫煌の新団体も選から漏れているように、コンテストの嚴格さを印象づける結果となっている。

1-1-2 台中

台中に関しては、年始と年末に行われた二つのイベントを紹介したい。

台湾布袋戲の現状（三）

台中では大甲鎮瀾宮を中心に繰り広げられる媽祖の巡航を軸として大がかりなイベントが催されてきたが、近年は「大甲媽祖國際觀光文化節」としておおよそ2月から5月の期間にさまざまな企画を設定している²。

2009年は、市内に設けられたいくつかの舞台において、3月13日から20日の八日間に「兩岸傳統戲曲匯演」と称する公演を十九回行った。（それ以外に「國內外表演團隊巡演」というシリーズ企画も用意された。）兩岸と銘打つように、台湾と大陸の双方から劇団を招いての競演という形を取るが、人形劇の分野では、地元の（台中）「聲五州掌中劇團」が二回（3/19、20）、大陸からは「泉州提線（糸操り）木偶劇団」を招いて三回（3/13、15、17）公演を行ったのである。

「聲五州掌中劇團」は、「五州」という名が示すとおり、黄海岱名人ゆかりの「五洲園」第三代の弟子にあたる王金匙氏が1965年に設立した布袋戲の名門団体で、台中を拠点として長らく活動してきた。2009年も年初からその「聲五州」を特集した「偶戲國寶：掌中戲迎春特展」という企画展が中友百貨公司（デパート）の展覧会として開かれており（1/23～2/8）、台中においては欠かせない存在になっている。

福建省泉州の糸操り人形劇は、前稿（『台湾布袋戲の現状（二）』）でも取り上げたが³、中国大陸では最も伝統を有する人形劇の一つであり、「泉州提線木偶劇団」は、2008年の北京オリンピック開会式のパフォーマンスに組み込まれたことでとりわけ注目を集めている団体でもある。海外での公演も積極的に行って来ているが、ここ台中には年末にも再度訪れて交流を深めている。

2009年12月、「行政院文建會（文化建設委員會）文化資產總管理處籌備處」の主催で、「2009（兩岸）非物質文化遺產特展」がここ台中で行われた（12/9～2010/2 下旬まで）。これは無形文化遺産の保護と伝承というテーマで企画されたもので、展覧会やシンポジウムとともに様々なパフォー

マンスが用意された。

人形劇に関わるプログラムとしては、台中「聲五州」の金光戯（12/19）はもちろん、台北「新西園」の伝統布袋戯（2010/1/2）の演目が入られた他、再び「泉州提線木偶劇団」（12/9、12）が招かれ、現代の台湾の若者に人気の「霹靂布袋戯」とそのコスプレ大会（12/9、12）が組み合わされた。台湾布袋戯の源流の地である泉州に敬意を払い、古典的な姿を継承する伝統布袋戯と、その発展系である金光戯を配置し、さらに台湾において独自に発展した布袋戯の現代的な姿を比較させることで、台湾布袋戯の全体像と未来とを示そうとした主催者の意図が感じ取れるものとなった。

1-1-3 雲林

雲林の2009年最大の「事件」といえば、11月3日（黄海岱名人の息子）黄俊雄氏とその子立綱氏の管理する倉庫から出火し、四百体あまりの布袋戯の人形が消失したことでなかったろうか。俊雄氏はテレビ布袋戯発展の立役者であることはいまさら述べるまでもないが、視聴者の英雄的存在であった「史艷文」などの重要なキャラクターを失ったことは、大きな反響を呼んだ。

雲林では2009年も恒例の「雲林國際偶戯節」（8/22～9/3）が開かれ、折しも「史艷文」誕生40周年記念ということで、「史艷文傳奇」とのサブタイトルをつけ、「史艷文」に関わる展覧やイベントも盛り込んでいただけに、なおさらこの「事件」が印象的なものとなった。

今回の「偶戯節」は、国内外の招待劇団が十六団体、若手のコンペにあたる「金掌獎」の競演団体が十団体と、ほぼ前年並みの規模であった⁴。その後も「好戯連台一週六劇場」として雲林布袋戯館で土曜日ごとに継続した公演が行われるなど⁵、雲林が布袋戯の中心地として果たしている機

台湾布袋戲の現状（三）

能は「事件」後も変わらないようである。

1-1-4 高雄

高雄ではここ数年布袋戲に関する企画が目白押しで、若手の実力ある団体の登場と相まって、非常に活気ある状況になっている。2009年は、前半は県政府文化局主催の「高雄縣偶戲藝術節」、後半は市立歴史博物館主催の「2009 愛河布袋戲展演祭」の二つのイベントが注目される。

前稿でも指摘したように、高雄は布袋戲のみならず、皮影戲（影絵）、傀儡戲（糸操り人形）の団体も存在する総合的な人形劇エリアである。その特長を生かしたイベントが1月26日から2月8日まで開かれた「高雄縣偶戲藝術節」であった。

本イベントは、展覧会「偶戲主題展」と、公演「國內傳統暨現代偶藝表演活動」の二本柱（と関連行事）からなり、後者は「皮影戲」「布袋戲、傀儡戲」「現代偶戲」の三部門を設けている。「表演活動」の参加団体を以下に挙げる。

①皮影戲	觀音山東華皮影劇團	遊記－九頭妖	1/26
	永興樂皮影劇團	半屏山傳奇	1/28
	復興閣皮影戲劇團	十二生肖由來	2/1
	宏興閣皮影戲劇團。	狐狸與烏鴉	1/30
	兒童紙影戲(彌陀國小、竹園國小)		
②布袋戲・傀儡戲	天宏園掌中劇團	西遊記－火焰山	2/3
	金興閣掌中戲劇團	玉筆鈴聲－生傳之特技編	2/2
	錦飛鳳傀儡戲團	嘉禮巡春戲元	1/29
③現代偶戲	九歌兒童劇團		
	無獨有偶工作室劇團		
	偶偶劇團		

渡 邊 幸 彦

参加団体は、高雄で活動するそれぞれのジャンルの代表的なプロの団体に、子供たちの団体を加えた非常にバランスよい構成となっており、高雄の現在の様子をよく反映しているといつてよい。

一方、2009年後半に設けられた「2009 愛河布袋戲展演祭」は、前年に引き続き行われた若者向けイベントで、若者に人気のある霹靂系の出し物が中心となっている。期間を通して高雄市立歴史博物館で「布袋戲内台戲主題展」が行われる他（10/31～12/20）、博物館内に設置された「高博劇場」で以下のような演目が上演された。ちなみに入場料各100元の有料公演である。

新世界掌中劇團	阿彌陀埤	10/31
	風雲再起～星之傳奇（上集）	10/31
	風雲再起～星之傳奇（下集）	11/1
	烏魚找媽祖討公道	11/1
金鷹閣掌中劇團	玉筆鈴聲一生傳之《漠龍征風策》	11/14～15
	玉筆鈴聲一生傳之《無武之境》	11/14～15
全樂閣木偶劇團 （テレビ布袋戲）	聖俠傳奇之凌霄戰獄	11/7
	聖俠傳奇之聖戰凌霄	11/8
	聖俠傳奇之末日凌霄	11/29
	聖俠傳奇之風雷劍塚	11/28
金鷹閣掌中劇團	玉筆鈴聲一生傳之《凌仙島戰紀》	12/5～6
	玉筆鈴聲一生傳之《煙海情義》	12/5～6
新世界掌中劇團	水滸風雲之英雄本色（上集）	12/12
	水滸風雲之英雄本色（下集）	12/13
新世界掌中劇團	風雲再起～無敵傳說（上集）	12/12
	風雲再起～無敵傳說（下集）	12/13

その他、「系列專題講座」として「從劇場藝術的觀點看布袋戲發展」（11/7）や「文化創意與偶戲」（11/14）といった学術的な催し物もあり、若者

台湾布袋戲の現状（三）

の楽しいだけのイベントではないという面も見せている。

1-2 特筆すべき団体の活動－「亦宛然」

1-2-1 「亦宛然」三種の公演

「亦宛然」はこの一年、三つの演目を中心に公演を行った。

2008年に『鞍馬天狗』の演目で、一年を通じて一つの演目を各地でじっくり演じていくという（音楽や演劇の近代的な公演の如き）いわゆるツアースタイルの（有料）公演を台湾布袋戲界でおそらく初めて行ったことは、「亦宛然」の画期的な業績として挙げるができるだろうが⁶、2009年も前年同様「南管布袋戲」の演目『水滸傳系列之盧俊義』で、本格的なツアー活動を行った。チケット代は150元と100元の設定で、前年の『鞍馬天狗』が100元の一律料金であったのに比べると、さらに有料公演の形を整えてきたといえるかもしれない。

「亦宛然掌中劇團 2009 全國巡演『水滸傳系列之盧俊義』と銘打たれた公演シリーズは下記のような日程で行われた。

5/ 2（土）	19:30	臺北縣藝文中心演藝廳
5/ 3（日）	14:30	臺北縣藝文中心演藝廳
6/12（金）	19:30	宜蘭縣政府演藝廳
6/13（土）	14:30	華山創意文化園區中五館
6/14（日）	14:30	華山創意文化園區中五館
6/26（土）	19:30	臺東縣政府文化暨觀光處 藝文中心演講廳
7/18（土）	19:30	南投縣政府文化局演講廳
9/12（土）	14:30	國立台灣傳統藝術中心
10/27（火）	19:00	宜蘭礁溪竹林養護院 (『藝玩大富翁』文建會 2009 表演藝術團隊巡迴基層演出活動として)

渡 邊 幸 彦

二つ目の重点演目は「傳統布袋戲巡迴演出—傳統公案戲『鐵公案』」である。裁判ものの傑作を押し広めるため、短期集中公演として行われた。

9/26 (土) 27 (日) 28 (月)	士林慈誠宮 (台北)
10/ 7 (水) 8 (木) 10 (金)	艋舺廣敬堂 (")
10/24 (土) 25 (日) 26 (月)	歸綏戲曲公園 (")

そして三つめの大きな演目は「亦宛然掌中劇團 2009 年度大戲/『清宮三百年之《年羹堯》』」である。11 月 21 日と 22 日の午後 7 時から「華山創意文化園區」の果酒禮堂で公演が行われた。チケット代は 500 元、300 元、100 元と、上記の公演と比べても破格であるが、「國家文化藝術基金會」や「台北市政府文化局」、「劉戀文化基金會⁷」の後援も受けており、それだけの価値がある公演なのであろうことは想像できる。

そもそも『清宮三百年』とは、故李天祿氏が 1948 年に初演し、その後十三年にわたって演じ続けられたと伝えられる大作で、新たな演出を取り入れ、それまでの布袋戲のイメージを打ち破ったとされる「亦宛然」の至宝である。残念ながら今回観ることはかなわなかったが、前年の『鞍馬天狗』に続き「亦宛然」に伝わる古典の掘り起こしにかかる意気込みは伝わってくるようである。

1-2-2 布袋戲普及活動

「亦宛然」はもとより青少年向けの人材育成活動に積極的な団体であるが⁸、従来より行っている小学校などでの出張公演の他、新莊市・新莊文藝中心と共同で布袋戲を広めるために学校の課外活動を積極的に支援していく取り組みを新たに始めたことが注目される。行政院文化建設委員會の「媒合演藝團隊進駐演藝場所合作計畫」のもと、「《牽牽偶の手，快樂向前走》傳統布袋戲校外教學活動」との名称で、幼稚園から小学生までを対象

に募集を行っている。新莊市は小西園との関係が深い地域であるが、前項で触れた「劉戀文化基金會」の主催の連続公演を2008年に「新莊客旅（ホテル）」で行っており、地域との関係を深めていったものと考えられる。

積極的に学校の中へ入っていくという点では、「關渡藝術節」への参加も挙げられよう。これは、「台北藝術大學（台北市）」主催の芸術文化祭で、「亦宛然」は、芸大の学生が組織した「亦宛然青年劇團」との共演で、10月16、17両日で四回の伝統的な北管布袋戲の公演を行ったとのことである⁹。また「銘傳大學（台北市）」においては、学内での展覧に協力しただけでなく、12月7日には学内での公演と学生たちへの（楽器等の）指導も行っている¹⁰。

「亦宛然」は団長であった（李天祿氏の息子）李傳燦氏が6月に64歳の若さで亡くなり、完全に第三代、第四代の若手が中心となって動かしていく体制となったことで、より若者の世代への普及活動を加速させている観があり、2009年も布袋戲界で最も活動的だった団体であると言ってよい。

2 中国における展開

2-1 上海国際木偶芸術節

中国の人形劇界で2009年の最も特筆すべき活動は、上海において初めて開催された「上海国際木偶芸術節」であろうと思われる。上海木偶劇団が音頭をとり、市政府等の後援を取り付けて企画されたこのフェスティバルは、11月5日から9日までの五日間に渡り国内外から二十三団体を集めて行われた。

中国における人形劇団は、元々は当然ながら国営であったのだが、ここ十年ほどの間に国からの援助が切り詰められ、運営方法の変質を余儀なくされてきた。海外公演に活路を見いだしたり、地方行政と結びつくことで

観光資源として付加価値を高めるという方法で生き残りをかけてきた団体もあるが、その多くは財政的に困難な状況に直面している。先に述べたように、2008年に開催された北京オリンピックの開会式の一部に福建省泉州の糸操り人形劇が組み込まれたことが国内外から注目を集めたものの、大きな流れを引き起こすまでに至ってはいないのが現実である。

今回この企画の中心となった上海木偶劇団は、すでに五十年近い歴史を有し、子供向けの演目を中心に海外での公演も積極的に行ってきた団体ではあるが、他団体と同様苦しい台所事情であることは変わらないようで、団長の何曉星氏はテレビのインタビューに答えて次のように語っている。

「我们就三、四十万走一个国家，或就两个国家。你要走十个国家，那你算算呢・・・这个，资金就很多。搞这么一个艺术节，二百来万，我邀请几十个国家，我这样一算，扩大中国的影响，文化走出去，我觉得还是划算的。

（「30か40万元では1カ国（か2カ国）へしか行けません。もし10カ国に行こうと思えば、資金がどれだけかかるのでしょうか？それで今回芸術祭を開催することに決めました。200万元で数10カ国の劇団を中国に招くことができ、さらに中国の文化も世界にアピールできるので割に合うと思います。」）（東方衛視「中日之橋」2009.11）

「芸術節」は、開催最終日にUNIMA（国際人形劇連盟）秘書長 TRUDEAU Jacques 氏などを含む国内外の九名の審査員（「金玉蘭獎評獎委員会」）によって、下記の如く五部門の表彰が行われたのであるが、コンテストのような形をとりながらも実際は参加した二十三団体の全てが何らかの賞を受け取るという、いわば予定調和の中で行われたデモンストレーション大会であったという印象はぬぐえないが、UNIMA 会長 PUDUMJEE Dadi（インド）の来訪もあり、海外の権威のお墨付きや上海文広演芸集団など上海の様々な団体のバックアップも受けたことで、今後の継続開催に道を

台湾布袋戲の現状（三）

つけたという点で、上海木偶劇团团長の当初の目的は達成されたと言ってよいだろう。

※劇団名、演目名はフェス発表時の中国語表記¹¹。

一	最佳劇目獎	
1	西班牙（スペイン）手影劇団	『別碰我的手』
2	上海木偶劇団	『阿里巴巴』
3	荷蘭（オランダ）木偶劇団	『庄園魅影』
4	河南省歌舞劇院木偶劇団	『牡丹仙子』
5	日本瞳仁座（ひとみ座）劇団	『忠実の大象』『野玫瑰』『野山梨』
6	広東省木偶芸術劇院有限公司	『真假美猴王』
二	優秀劇目獎	
1	上海陳云故居暨青浦革命歴史紀念館	『童年的足迹』
2	錦州木偶劇団	『腿的故事』
三	創与表演獎	
1	德国（ドイツ）事特劇団	『運動巨人』
四	視覚芸術獎	
1	保加利亚（ブルガリア）“丹尼与黛西”劇院	『小雨点公主』
2	台湾廖文和布袋戲団	『大勇侠』
3	日本銅鑼劇団	『獅子与蝴蝶』
4	韓国現代木偶劇団 Show & Arts 公司	『木偶之城』
五	最佳木偶芸術傳承獎	
1	福建漳州木偶劇団	『水仙傳韵』
2	泉州市木偶劇団	『古意新姿活傀儡』
3	晋江掌中木偶劇団	『沈香救母』
4	捷克（チェコ）卡高馬道劇団	『木頭馬戲団』
5	台湾亦宛然掌中劇団	『大鬧水晶宮』
六	芸術創意獎	
1	美国（アメリカ）中国戲劇工作坊	『老虎的故事』
2	韓国弄甯木偶劇団	『郭秃』
3	比利时（ベルギー）小蝴蝶劇院	『潔具也瘋狂』
4	奥地利（オーストリア）視覚芸術劇団	『再次發生』
5	香港明日芸術教育機構	『香港故事的背影』

2-2 問題点など

一口に人形劇といってもその演出形態は小規模なものから大きな装置を必要とするものまで様々である。また当然ながら、国や地域の特色を反映した歴史をそれぞれの団体が有している。「上海国際木偶芸術節」では、欧米から八団体、中国（大陸）から（南部を中心に）八団体、その他東アジアから（日本二団体、韓国二団体、香港一団体と台湾二団体の）七団体と、バランスをとった参加団体の構成になっているが、おそらく主催者が「国際」ということを強く意識したことで、かえって同列で競演させることを困難にしたように思われるのである。今回注目を集めたドイツの「運動人形」のように大型の人形を数名がかりで動かすパフォーマンスや、上海木偶劇団が披露した「アリババ」のように等身大の人形と人間とが一体化した演目などが観客の目を引きやすいのは間違いないが、こうした現代的な劇団と、小規模で伝統的な演目を主体とする劇団とが、同一環境下で競うということはほとんど無理な話である。

上海で開かれる国際フェスとしては1993年に始まった「上海国際映画祭（上海国際電影節）」が有名だが、まだ十数年の歴史しか有していないにもかかわらず、国際映画製作者連盟（FIAPF）の公認を受けたコンペとして世界的にすでにある種の地位を獲得している。ただし、これは映画という世界共通のフォーマットが確立しているからこそ可能だったのであり、人形劇で同じことを目指そうとすれば、全く違ったアプローチを必要とすると思われるのである。

今回台湾からは、海外経験も豊富な「廖文和」と「亦宛然」の布袋戲団体が二団体参加したが、大きめの人形を用い金光戲の派手な演出も得意とする「廖文和」に対して、「亦宛然」はあくまで伝統的な少人数による小規模な舞台にこだわった演出を旨としている。今回中国福建省の「晋江掌中劇団」が同じ布袋戲の団体として参加しているが、中国大陸においては

台湾布袋戲の現状（三）

台湾のように布袋戲の伝統を受け継いできたわけではないため、小さな指使い人形を用いるという点を除けばむしろ現代的な舞台装置や演出法を多く用いており、台湾「布袋戲」とはやはり別物であるという印象が強い。「亦宛然」が演じた「大鬧水晶宮」は筆者も何度か観たことがあるが、団の演目の中では物語よりも技や仕掛けに重きを置いた子供にもわかりやすい演目であるものの、あくまで小さな戯台の枠内で演じることには変わりがなく、今回の参加団体の中で最も地味な印象を持たれたかもしれない。

「亦宛然」は、今回はある意味招待団体として敬意を以て待遇されたといえようが、「亦宛然」がコンテストに合わせた演出にとらわれすぎてしまうと、せっかくここ数年台湾内で行って来た伝統の復興と継承の精神に沿わなくなってしまうことが危惧される。「上海国際木偶芸術節」の主催者側も海外の団体をいかに取り込むかということを優先せずに、まずは中国国内の人形劇振興のための競演という視点を重視して、国内（北部、内陸部）の多くの団体との連携を模索していったほしい。

おわりに

日本国内で2009年に行われた台湾布袋戲関係の行事としては、立教大学の「台湾指遣い人形劇・布袋戲レクチャー&デモンストレーションー永続創新：現代アジア社会における伝統的人形劇ー」（立教大学太刀川記念館にて、2009/6/18、18:30～20:00）と題された企画が目される。今回招致されたロビン・ルイゼンダール氏が館長を務める台北の「林柳新紀年偶戲博物館」と、その所属劇団である「台原偶戲團」は、台湾の布袋戲の世界でもユニークな存在として認知されているからである。

台北の大稻埕地区にある「林柳新紀年偶戲博物館」は筆者も何度か訪れたことがあるが、小規模ながらも現代につながる台湾布袋戲の歴史をつぶさに辿ることができるばかりでなく、アジアにまで目を向けた視野の広さ

を感じさせる博物館である。また、そこに併設された劇場では「台原偶戯團」に接する機会も得られるが、伝統の枠にとらわれず、布袋戲の新たな境地を切り開くオリジナルの演目を演じている点が評価されているのである。

近年台湾から日本へ布袋戲関係者を招致した例を振り返っても、「亦宛然」、「新興閣」、「小西園」といった海外経験豊富な伝統劇団の公演を設けるか、「西田社布袋戲基金會」のような研究機関とのシンポジウムのような形を取るかという方法が主であったが、いずれにしても一過性の企画に終わっているという印象は否めなかった¹²。

良くも悪くも中国大陆と台湾との間の人形劇交流は確実に進んでおり、これからも後戻りすることは無いと思われるが、日本がそこに絡んでいくかどうかと考えると、なかなか未来の状況を想像しにくい。ただ、立教大学ではルイゼンダール氏を研究員として招聘したとのことであるが、外国人として台湾布袋戲の中でも独自の道を歩んでいる人物であるだけに、これを機会に、学術研究の面はもちろんであるが、興行も含めた新たな視点で日本との交流が生まれる可能性はあろうし、前稿でも指摘したような人形劇フェスティバルを通じた劇団間の継続した交流¹²において、アジアの中で日本が果たす役割も生まれてこようと思われる。

注

- 1 前稿『台湾布袋戲の現状(二)』(『同朋文化』第四号、2009.3発行)「4-1小西園」でも、「小西園」と新莊市政府や「新莊文化藝術中心」との協力関係について述べたが、2009年も前年に引き続き新莊市と結びついた企画「新莊老街布袋戲風華再現」(新莊市全安活動中心にて、6/27、28)を継続している(『乾坤印』『湯伐夏』『魚藏劍』の公演)。地域が布袋戲団と結びついて共存共栄を図るという意味では「小西園」はよき手本となっている。
- 2 媽祖に関わる行事としては、他に2009年10月の彰化十二宮の巡行があり、「2009彰化縣媽祖遶境嘉年華」の企画の一部として布袋戲の公演が組み合わせて

台湾布袋戲の現状（三）

行われた。

彰藝園掌中劇團（北斗奠安宮）	10/11
永五洲掌中劇團（溪州后天宮）	10/11
大台員劉祥瑞掌中劇團（員林福寧宮）	10/12
錦興閣布袋戲團（埤頭合興宮）	10/12
金華龍掌中劇團（芳苑普天宮）	10/13
鹿港金興閣掌中班（王功福海宮）	10/13
東原五洲園掌中劇團表演（二林仁和宮）	10/17

3 『台湾布袋戲の現状（二）』（同上）「はじめに」で、2007年1月に泉州提線木偶劇団の名人黃奕氏が亡くなったことに触れ、「4-2-1」で、「亦宛然」が同団との交流を推進していることを取り上げた。

4 「2009年雲林國際偶戲節」参加団体は以下の通り。

「金掌獎」参加団体	招待団体				
1 明星園掌中劇團	阿忠工作室	布袋戲	金田人形座（日）	国外	
2 高雄新世界掌中劇團	春秋閣掌中劇團		偶師 Grego（米）		
3 五洲金華龍掌中劇團	全樂閣木偶劇團		GANDA SALI PUPETT THEATER(印尼)		
4 昇平五洲園	中五州蕭上彦掌中播藝術團		Massimo Godoli Peli(伊)		
5 真雲林閣掌中劇團	小西園掌中劇團		無獨有偶工作室劇團		布袋戲以外
6 五洲藝華園	明正廣播節目製作社		小青蛙劇團		
7 五州明聲掌藝園掌中劇團	亦宛然掌中劇團		海波兒童劇團		
8 黃世志電視木偶劇團			偶偶偶劇團		
9 雲林黑人掌中劇團			一元布偶戲團		
10 台中聲五洲掌中劇團					

5 「好戲連臺」シリーズは以下のような劇団が参加している。

螺陽掌中劇團	10/24	逢甲大布袋戲團	11/21
(飛雲舞蹈團)	10/31	無限人形劇場	11/28
隆興閣掌中劇團	11/7	復興閣皮影劇團	12/5
新興閣掌中劇團	11/14	廖千順布袋戲團	12/12

上記企画と関連して、「好戲連臺－黃世忠布袋戲成果展」が雲林縣北港鎮朝天宮にて開催された（2010/1/23～）。

6 『台湾布袋戲の現状（二）』（同上）「4-2-2 旧演目の復活、再現」参照。

7 『台湾布袋戲の現状（二）』（同上）「4-2-4 個人的支援者の存在と公演」参照。

8 『台湾布袋戲の現状』（『同朋文化』第二号、2007.3 発行）「3-3-2 亦宛然家族」参照。

9 「亦宛然」のHPに（<http://www.iwj-puppet.com/tw/>）その紹介記事が掲載されている。「2009 關渡藝術節演出圓滿落幕！」2009.10.18

- 10 同上。「12月7日銘傳駐校藝術家演出活動」2010.1.04
「銘傳大學桃園校區駐校展覽，即日起至11月13日」2009.10.12
- 11 東方網 (<http://www.eastday.com/>)「首屆上海國際木偶藝術節暨請賽獲獎名單」2009.11.10 などの記事を元に作成。
- 12 『台湾布袋戲の現状』（同上）「3-3 北部（台北）」、「注11、14」など参照。
- 13 『台湾布袋戲の現状（二）』（同上）「注11」など参照。

参考文献・資料（主なもののみ）

雑誌

- ・『傳藝』80期（2009.2）
現場直撃「猴王鬥智・台泰戲偶喜相逢」 郭士榛 台原偶戲團 p.48～52
傳藝講堂「二〇〇八懺情録」 紀慧玲 p.78～79／展演出版訊息 p.116～120
- ・『傳藝』81期（2009.4）4月專輯「客家傳統藝術大觀園」 吳榮順 p.5～10
4月專輯「客家布袋戲」 高燈立 p.14～19／展演出版訊息 p.117～120
- ・『傳藝』82期（2009.6）現場直撃「大道公媽祖婆大和解」 殷兆宏 p.48～49
焦點人物「隱形遊俠陳錫煌」 郭瑞鎮 p.62～67
傳藝講堂「談傳統文化、就從這裏先開始吧！」 林谷芳 p.68～69
戲曲「北管戲曲風華不再」 高燈立 p.78～80／展演出版訊息 p.117～120
- ・『傳藝』83期（2009.8）8月專輯「偶戲的創意與傳承」 p.5～35
焦點人物「李傳燦」 潘彥銘 p.54～57／觀點「掌中乾坤・戲弄千軍」 p.79～81
展演出版訊息 p.114～120
- ・『傳藝』84期（2009.10）10月專輯「二〇〇九亞太傳統藝術節」 p.5～39
風災特別報道「在風雨飄搖中受難的戲班」 江武昌 p.44～47
展演出版訊息 p.114～120
- ・『傳藝』85期（2009.12）戲曲「台湾布袋戲聲音的生產工廠」 p.70～78
展演出版訊息 p.114～120